

乳児クラスの保育より(1)

Mちゃんと靴下

田辺 敦子

人は誰でも、自分の中に温めている興味・関心事（以下『大事な物』）があります。それが他の人にとっては特に注意を引かないような何気ない物事であったとしても、その対象に関する小さな出来事が、本人にとっては大きな心の動きにつながる場合があります。○歳児クラスの担任をするうえでも、小さな子どもたちの中に、このことが同じように育まれているということが生活の折々に感じられます。

わがクラスのMちゃんにとって、靴下はここ最近の専らの『大事な物』になっています。このMちゃんの靴下好きに私たちクラスの大人（子ども九名に対して保育士三名と

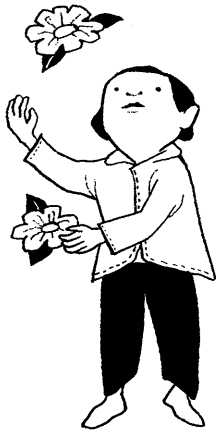
看護師一名という大人の配置になっています）が気付いたのは、実はMちゃんの涙がさっかけてした。

ある時、ひとり遊びを満喫していると思つてMちゃんの姿を見守っていた大人を目の前に、突如Mちゃんが泣き出すということが何度か続きました。何が原因なのかとよく観察してみると、どうやら履いていた靴下を自分で脱いでは泣き出すということのようでした。丁度私がMちゃんのそばにいた時にも同じような場面に出会ったので、泣き始めたMちゃんに「Mちゃん靴下脱げたのね」と声を掛けてみました。するとMちゃんは、こちらが状況を理解したことへの安心感からか「そうなの」と言わんばかりに大きくくうなずいて脱いだ靴下を見せてくれました。続いて「靴下、また履く？」と聞くと、再び大きくうなづいて、今度は靴下を履かせてもらおうべく足の前に出して座り直しました。そして、靴下を無事履き直せた後に「ハイ、履けました。よかったね」というと、納得したのか、にこつと笑つてもとの場所に戻つて行きました。

しばらくは、また脱いだ靴下を持つて大人に訴えに来るということが続きましたが、私たち大人は皆で同じように、毎回脱いだ靴下を履かせてあげるようにしました。Mちゃんがなぜ自分の靴下を履いては脱ぎ……という動作を繰り返すのか納得することが出来たからです。Mちゃんは、靴下を身につけていたいという『大事な物』への愛着と、その大好きな靴下で遊びたいという好奇心とを交互にめぐらせていたのでしよう。

何度も何度も繰り返すその微笑ましい様子に、私たちはあたたかい気持ちでいっぱいになりました。

このことがあつてからまもなくして、Mちゃんが表現できる言葉『ママ・まんま・バイバイ・わんわん』に『くつ（靴下）』が新しく加わりました。そして、自分の靴下への関心が、今度は仲間の靴下の方へも向けられるようになり、クラスの仲間の足を指差しては「あー、あー」（靴下履いていないね）「くつ」（靴下履いているね）と確認するようになりました。また、他の子が脱いだ靴下が遊びのコーナーに落ちていたりすると、ぱっとその靴下を手にして、仕草で大人に報告したり、持ち主の子のところへ持って行ってあげるといふこともみられる様になりました。これには私たちも目を見張ってしまいました。自分と靴下との間に育まれた絆が、今度は靴下を介して周りの世界へと、その関心が拡がっていくことになったのです。まだ『自分と大人』『自分と物』との関係をあたためている時期ではありますが、その中でも靴下という『大事な物』を通



して経験できた様々な関わりは、成長の次のステップとなる『他を知る』ことへのきざしとして、Mちゃんの胸の中に位置付けられたのではないでしょうか。

この『Mちゃんと靴下』のやりとりをテーマにした話題が、家庭と園とを結ぶ連絡帳の中でも取り上げられ、ご両親とも多に共感することが出来ました。そしてMちゃんのお母さんからも、こんなエピソードを聞くことができました。

『本当にMは靴下が好きなのです。先日のお休みの日に、家族で買い物に出かけたのですが、靴下売り場を通りかかると、ずらりと並ぶ靴下を前に、突然自分の靴下を脱ぎ、並んでいる靴下に手を伸ばそうとしていたのですよ』

『昨日、病院の待合室で順番を待っている際、隣に座っていた子の靴下が、たまたまMの持っている物と同じだったようなのですが、Mはすぐにそのことに気づいて「それはMの靴下だよ!」と言うように「あー、あー」と訴えていました。本当によく気づきますよね』

Mちゃんのお母さんは、これらのエピソードにびっくりしながらも、あたたかなまなざしを持って我が子の育ちを的確に捉え、その意をしっかりと汲み取っているのだと、その行間から感じ取ることができました。

このように、靴下と共に数々の出来事を体験したMちゃんですが、今以てその『大事

な物」とMちゃんとの共演は続いています。お昼寝前に靴下を脱いで衣類カゴに入れるという瞬間だけをとっていても、毎日劇的なオペラのワンシーンを見ているかのようには、その都度Mちゃんの一喜一憂が伝わってきます。時には自ら得意げに靴下を脱ぎ、カゴにぽんと入れて「バイバイ」と手を振り、勇ましくベッドの方へ歩いて行くこともあり、また時にはなんとも切なそうに靴下を見つめ、カゴと手との間を行ったり来たりさせることもあります。その際もそばにいる私は全くの観客であり、ただMちゃんと靴下とのやりとりを見守り、最後に「ブラボー！」と言うかのごとく笑顔で受け止めることのみ許されているのですが、観客の私にとっても毎日のそのシーンが非常に意味深いものになっており、Mちゃんと共に貴重な時を共有しているということへの感謝を深く感じています。

子どもたちにとっての『大事な物』は、ごく身近なものが対象なることが多いように思います。日常性の中にみられる子どもたちの心の動きをタイミングよく捉えていく為には、私たち保育者もゆとりを持って、自らの『大事な物』と向き合っていくことが必要なのだと思えます。

(かしのき保育園)